

第26号

アクトス

文芸集団 ACTOS  
平成二十七年五月



アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしずく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス代表・編集長 大西 亥



目次

ぬめっ！ 前立腺肥大 石川希理 6

小説 グット・パートナー 高阪博一 11

小説 夢 小野村 新 25

阿倍野友之・石川希理対談 新しい文明論 29

詩二編 ロスト 優しさのかたち 大西隆史 42

俳句 「平成二十六年NHK全国俳句大会入選作」 彩華 48

湖北へ 明花 49

童話 星月夜はだつこの日 石川希理 56

編集室から 64

ぬめつ！ 前立腺肥大

石川希理

※お食事の時は読まないでね。

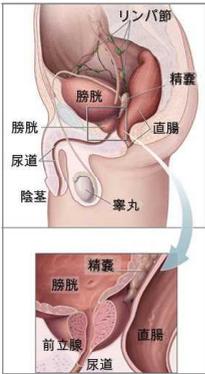
前立腺肥大の治療を受けた。  
前期高齢者になつて、身体のア  
チコチが老化しだしている。

老化というのは、実際は成長の  
止まる二十五歳くらいから始ま  
っている。ただ、スピードは緩やか  
で、それが概ね五十代からギアが  
セコンドからサードに入り、六十  
代になるとトップに加速するよう  
である。

一般的に、男性のしらが頭は  
五十代から始まる。頭髮はよく  
目立つ老化の象徴的な部分であ

る。そして頭髮が細く少なくな  
り、人によれば後頭部や前頭部  
が薄くなる。皮膚が弛みシミが現  
れる。四苦八苦の四苦は「生・老  
病・死」であつて避けられない。こ  
の「老」は当然内蔵にも及ぶ。む  
しろ内臓の老化が表面に現れる  
のかも知れない。また心身の「身」  
が老化しているのだから心もそう  
であるだろう。

さて、肉体の老化の中で、前立  
腺肥大は男性の老化現象の一つ  
である。



図はウイキペディアからコピー  
させていただいた。膀胱の下にあつ  
て尿道の付け根にあるクルミ大の  
組織である。前立腺の役割につい  
ては未解明の部分が多いという  
が、主な働きは生殖能力にかか  
わる前立腺液の分泌だ。

女性の閉経と同じく、男性も  
生殖能力が不必要になり、年齢  
とともに前立腺は萎縮するか肥  
大する。昔は萎縮していたが食生  
活の向上・欧米化により、現在で  
は八十歳までに日本人男性の八  
十%が前立腺肥大症になるらし  
い。

私の場合、三、四年前から夜  
間頻尿といつて寝てから目覚める  
までに三、四回トイレに起きてい

た。また、小心・神経質なたちである。駅のトイレなどで背後に人が待つていたりすると、よけいに「早くしなければ」とあせる。そうすると、なかなかでない、そして勢いが無い。自宅ではさほどでもないのだが、気になつて「ノコギリヤシ」がいいとか、ゴマの成分が良いとかいうサプリメントの広告が目がつていた。

「しかしまあ、「歳のせいだ」と諦めていた。ところが最近はお前立腺ガンという病気も多いと聞いている。私は四十八歳の時に胃ガンで胃を切つている。なんとなく心配で「一度泌尿器科にいかねばならんなあ」と思いつつ、それでも「チト恥ずかしいなあ」「めんどろ

んなあ」と過ごしてきた。

ところが、私より数歳うえの先輩がお二人、このガンにかかり、お一人は寛解されている。このガンは発症までに四十年、発症しても比較的治りやすいという。でももうお一人は転移して抗がん剤の治療中である。

それで、お聞きしていた著名な江藤弘先生のおられる王子クリニックを訪問することにした。

電話してから訪ねると、受付前にずらりと座つておられたジジババ様達が一斉に私を見た。

見られたように思う自意識過剰なのではない。私もジジ仲間なのだが、被つている帽子を脱ぐと坊主頭である。高齢者には坊主

頭が多いような気がするが実はさほど数が多いわけではない。

少しドキリとしたが、歳のせいかもしれないが、皆さん歳も病気もお仲間なので、私は目の端でまだ通つておられるとかいう知人を探した。が、そうそう偶然にはおられない。

おしつこをととり、問診票を書き三十分ほどで、名前を呼ばれた。

ここは新しいし、手術設備もあり、採光の工夫もしてあつて明るい。診察室に入るとマスク姿の江藤弘先生に、「ニロリと見られた。

「夜間の頻尿で」  
「そこに横になつて」

壁際のベッドに横たわると、看護師さんが「はいズボンを下ろし

てお腹を出して」といいつつ、たちまちベルトを緩められた。

ゼリー状のものを塗られて、腹部超音波検査。「21世紀の聴診器」といわれて、X線のような被爆もなく、痛みもない。押さえつけるので患部の移動に注意が必要といわれる。

最初は丁度陰毛の上辺りだ。それから横になつて壁の方に身体を倒して左右の腰骨の上。(最初は膀胱? 次は腎臓かな?) それとも前立腺を横か

ら? と考えたのは後からの話。「たいして大きくないから薬を飲んでみましよう。それから尿検査は異常なし」

それだけでホツとする。

血液検査をしますので、前で待つていて下さい、といわれて、「ありがとうございました」と頭を下げて診察室をでた。

その後すぐに血液検査。これはPSA検査といつて、前立腺ガンかどうか判る。ただ非常に敏感な検査で、支障のない小さなものまで拾うといわれている。健康な人のPSAはおおよそ2 ng/ml以下。加齢にもなつて増え、私のような前期高齢者では、4 ng/ml 以下ならばいいらしい。また、肥大病や炎症があつても値が上がるらしい。ガンが酷い場合は1000以上などという値があるという。

血液採取の後、2週間分の『フリバスOD錠75mg』がでた。

2週間後ににかけて、今度は尿の勢いとか量の検査があるとい



う。まあそれも気になるが前立腺ガンが心配である。

ただ『フリバスOD錠75mg』には驚いた。その日の夕食後から服用したのだが、普通に食事してビールの一缶程度なら、夜中のトイレが一回に減った。

この薬は「前立腺・尿道の $\alpha$ 1受容体を選択的に遮断し、前立腺・尿道の平滑筋収縮を抑制することにより尿道内圧を低下させ、前立腺肥大症に伴う排尿障害を改善します。通常、前立腺肥大症に伴う排尿障害の治療に用いられます」とオールアバウトというHPにある。一日の最高量は75mgまでだから、「悪い症状か」と気になるが、とにかく改善

された。低血圧とか肝機能障害という副作用は出なかつたが、きつい薬なのだ。

2週間後。8時半にトイレに行つて10時に家を出て、10時15分にクリニックに着いた。月曜だつたが空いていた。

トイレをしてから約2時間が経っている。

「ギリギリまで我慢して」ということで、11時15分に検査に入った。四畳半ほどの個室に入る。普通の便座の他に凶のようない座がある。

「立ってされますか、座つてされますか」

と看護師さんに聞かれたので

「座つて」とこたえる。立つてなら便座をあげるだけのようだ。

我が家も温水暖房便座だが、これに立つて用を足すと、尿の細かいものが飛び散るようである。だから座つて用を足すのだが、うっかりすると便器の前に尿をかけることがある。このごろそれに対応した

便座が開発されたというから、まあ日本この

温水便座は凄いものだ。

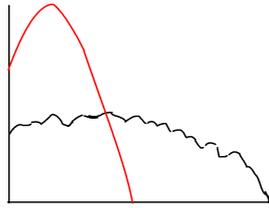
もつともこの検査用のものは、温水暖房でなくてただ下に尿が落ちてたまる仕掛けである。透明



の容器にメモリがついている。

部屋の鍵をかけて普通に用を足して手を洗つてでる。

その後診察に呼ばれたら、すぐにまた膀胱の上を超音波検査された。



「残尿はない」といわれる。

そして図のような黒い線の書かれた紙を出された。

私の尿の出方である。それから見にくいので赤にしたが、図のような線を黒で書かれた。

「若い人はこうなります」

「あははは、ひひひ」

私は小さく苦笑いするしかない。

勢いが無いのだが、ま、67歳である。

「ガンは大丈夫です」

とPSA検査の用紙を渡された。

値は1.30。高齢者でも4.0以下なら大丈夫と前に書いた。

とにかくホツとして、2ヶ月後の予約を取り、『フリバズOD錠75mg』をいただいた。

まあいつまで続くか判らないが、毎日糖尿の飲み薬3種類にこれ加わることになった。

老と病はほぼ重複していて、難

儀な話である。ご同輩諸氏、健康寿命のために、病院に行きましょ。

そして元気で「死」を迎えたいものである。

あ、私の場合、半年に一度になつたけれど、目の検査があるし、歯も虫歯はないが、時折詰め物が取れたりしているし…。

まあ、このような随筆がかけているのでよしとしたいと…。





グット・パートナー

高阪博一

交響曲はフィナーレに向って加速する。楽器が殆ど加わり、弾けそうな強奏が最高潮に達しようとしている。指揮者は我を忘れたかのように、頭を振り乱し、タクトが激しく宙を舞う。音の洪水が猛烈な飛沫となつて、身体全体に襲い掛かつてくる。大太鼓とドラが、雷の轟きと紛う音を同時に響かせた。ドン、ジャジャーン、その刹那、びたつと音が止んだ。えも言われぬ至福の静寂がおとずれた。もう少し、と思う間もなく、誰かが「ブラボー」と叫んだ。この馬鹿が、と毒づいた時、首ががっくりと後ろに仰け反った。

いたー！

鞭打ちになりそう、と坂本さんは首を軽く撫で

ながら、ぼんやりとした頭をゆつくりと回した。ほんのニメートルほど離れた所にあるCDプレイヤーのディスプレイが、青く点滅している。この頃よく寝るなあ、と呟きながら立ち上がつて、プレイヤーとアンブを消し、もう一度椅子に坐り直した。何気なく腕時計に目をやると、午後五時を既に回っていた。窓越しに見える西の空が、鮮やかな茜色に染まつている。やつぱり、疲れてるよなあ、と坂本さんは薄くなつた頭髪を、大事そうに、そつと掻き揚げた。あれ以来、腰も痛いし、足も痛い、眼もおかしい、歳やなあ、と誰に言うともなく、ぶつぶつと低い声を出して、どこか細くなつたような気がする足をゆつくりさすつた。

半年前に、介護保険の被保険者証が届いた。それまで、保険料を払うだけのものだったが、俄に現実味を帯び出した。そや、高齢者なんや、と改めて

坂本さんは思った。身体も元氣だ。特に、病氣もした事はない。髪の毛は少なくなつたが、まだ残りもそれなりにある。一日数千歩の散歩は欠かさない。腹の出ていないスリムな身体はGパンがよく似合う、と自分では思っている。これだけ揃えば若い筈だ、いや、若い、といつも心の中で大きな声を張り上げている。

シルバー仲間の内では、若手の坂ちゃんを通る。それが妙な自信にもなつていたのに……。どうして、なんで、こんなに疲れるのかなあ、やつぱり肉体労働なんや、と坂本さんはこの二か月程前から、ずっと二人で続けているあの仕事を忌々しい、それでいて、ちよつと楽しい、相反した気持ちで思い出していた。

あれは、金木犀の甘い香りが微かに漂う時分だった。或る日の昼下がりに電話のベルが鳴った。受話器を取ると、地元のシルバー人材センター山本主

任の聞き慣れた声だった。

「いい時候ですね。元氣ですか。今年は暑い言うて、坂本さんは休んでほつたけど」

「元氣よ、ちよつと、サボつてただけ」

「ふふ、そうやろうなあと思つてましたけど。仕事、しませんか？」

「してもいいけど、仕事によるなあ。どんな仕事？ 楽で時給が高いの」

「そんなんあつたらわたしが行きますわ。まあ、それはおいといて。ちよつと込み入っているので、明日十時に事務所に来てもらえますか。詳しく説明しますので」

「明日やろう、別に何もないし、分かつた、行くわ。楽やろうね」

「まあ、まあ、よろしいやん。お会いしたうえで。フフ」

どうも、あの最後のフフフという小さな笑いが、坂本さんには氣になった。それでも、仕事を斡旋し

てくれるのは有難かつた。別に、お金に困っている訳ではない。夫婦二人なら、年金で生活できる。特に、仕事がしたい訳でもない。効果は別にして、要は呆け防止になると思つているからだ。しんどくない仕事がいいけどなあ、と坂本さんは贅沢な事を考えていた。何でも仕事をするのに、なかなかくれないとぼやいているシルバー仲間が多いというのに。

真つ青な空の広がるからりと晴れた朝だつた。定刻に事務所に行くと、山本主任はほつそりとした胡麻塩頭の男性とソファーに坐つて、話をしていた。お早うございます、と言いながら坂本さんは頭を下げた。坐つて、坐つて、といつものように気さくに言われたので、その男性の横に腰を下ろした。ちらつと見た男性の横顔は、ほんの少し頬が弛み加減で、額と口元に小さな皺もあり、少なくとも自分より年上だと坂本さんは思った。

「おはよう。紹介するわ。こちらは本田さん。それから、こちらは坂本さん」

山本主任がにこやかな顔を双方に向けながら、口火を切つた。お互いに硬さの残る挨拶を交わして、山本主任の言葉を待つた。

「早速やけど、仕事の説明をするわ。念のため、聞いてくけど、持病ないよね。例えば、腰やどか、膝やどかに」

別に何もない、と二人とも首を縦に振つた。山本主任は了解の表情を浮かべながら、仕事の概略を話し出した。

仕事の内容は、坂本さんの住む日町チヨウにあるカーブミラーの不具合をチェックし、それを写真に撮ると共に一覧表に纏める事だつた。坂本さんは車の免許を持つていないので、最初はピンと来なかつた。話が進むにつれて、角々に立っている丸い大きな鏡である事を理解した。車が鏡に映り、走つて来る方向などが分かる。あれで安全確認ができるなあ、と坂本さんはそんな事をのんびり思い浮かべていた。ちよつと、と言いながら中座した山本主任が、何か

持つて席に戻って来た。

「ミラーはこれだけあるんやけどね」

山本主任が、丁度A4大の紙の束をテーブルの上に、ばさりと置いた。

「これ地図。六十枚あるんやけど」

何の躊躇いもなく、さらつと山本主任が言い放つた。結構な嵩カサになつているその束を坂本さんはぼんやりと眺めた。促すような顔で、山本主任が二人を見ている。

「ええつと、縮尺は千百五十分の一で、H町全域が今言つた枚数に分割されているよ。地図、手に取つて見てくれはるかなあ」

二人は言われるままに、その地図の一枚を手にとつた。坂本さんは浅く坐り直してそれを見た。本田さんは指先で軽く摘まむような感じで、それを見ている。

地図には見覚えのある公共施設や個人住宅名などが記載されている。目に付くのは、青い丸印だ

つた。横に小さな三桁の数字とアルファベットと漢字一字が印字されている。その印は二十程度あった。これなんかなあ、それにしても、ずいぶんあるなあ、と多少うんざりした気持ちで、坂本さんはその地図に見入つた。ちらつと横を見ると、本田さんは事も無げに、のんびりそれを見つめている。

気持ちを見透かすように山本主任が坂本さんの目を見た。

「その青い丸がミラーの位置。次の数字がミラーの大きさ、三種類あるけどね。アルファベットはミラーの付いている数、一つから三つあるよ。最後の漢字はミラーの付いている支柱の状態」と一気に言い終え、一呼吸おいて、もう一度、坂本さんの目を見た。

「ミラーの数は全部で九百程度あるけどね。どう、やる、調査」

そう一気に言われても、どうもイメージが湧かない。単刀直入すぎる気がして、坂本さんは返事

に困ってしまった。本田さんはどうなんやろう、やるんやろうか、と坂本さんは横をちらちら見やった。本田さんは落ち着いたものだ。悠然として、にやつと笑うと、山本主任の方へ顔を向けた。

「五年前、やったね、前回は」

「そう。本田さんは経験者やもんなあ。余裕のヨツチャン、違う？ ええつと、あの時のパートナーは確か……」

本田さんの顔がちよつと曇つたように、坂本さんは感じた。何かあったのかなあ、と本田さんをまた横目で見えた。どことなく音量の少なくなつた声で、本田さんが言葉を返した。

「オカちゃんや」

「そうそう、岡田さんや。元気やったのに、去年やったなあ。前の日に仕事の打合せしてたんやで。突然過ぎたよなあ。幾つでしたっけ」

「僕より一つ下、七十九」

「ちよつぴり、早いかなあ」

「いやいや。いつも言うてた通りに逝つたから、いいと思うわ」

「なんて、言うてはつたんですか」

「PPK」

「なに、それ」

「ピンピンコロリつて事。独り暮らしで、ボケたら……とも言うてたなあ」

「ほんま、切実な話やもんね」

そんな話をしながら、二人は懐かしそうに、ちよつと湿つた笑いを浮かべていた。

二人の喋っている間に、経験者が一緒なのだから大丈夫、と坂本さんはこの仕事をする事に決めた。仕事の段取りはもちろん本田さんが決めた。「そうやなあ、坂本さんに白いボード書きとあとの纏めを頼もうかなあ。僕はナビゲーターとカメラマン、するわ」

歳の割には、さらりと横文字が会話に入る。くどくどとした話の繰り返しが無い。会話が前へ前へ

とどんどん進んでいく。少なくとも、傘寿を過ぎた人には思えなかつた。そう思うと、額や口元の皺は目立たないような気がしてきた。気のもんやなあ、と坂本さんは思いながら、本田さんに質問を投げかけた。

「歩くんですか？」

「なんぼ、小さいからと言って、三万以上住んでいる町やで。そらないわ」

「すると、車ですか？」

「狭い所に入つて行くんやで。それもないなあ」

「したら……」

「ジ、テ、ン、シヤ。自転車やがな」

本田さんはどこか愉快そうに、坂本さんの方を見ながら、言うのだった。

やれやれ、乗つたり、降りたりするやろうから、疲れそうやなあ、と坂本さんは嫌な予感がした。それでも一方では、傘寿を過ぎた人がやると言うのだから、それ程ではなからう、とも思つた。愉快そうな

人なので、楽しいかもしれない、と坂本さんはそんな思いも抱いた。古い自転車の油をさそう、と坂本さんが考えていると、本田さんが軽く微笑みながら、静かに声を出した。

「したら、明日、朝の九時に、この事務所で。いい？」

「いいですよ」

「集合はいつもこの事務所に決めよか」

「了解です」

坂本さんがそう返答して、立ち上がろうとするど、山本主任が笑いながら二人に向つて、言つた。

「あ、そやそや、大事な事、忘れてたわ。時給は八百円」と。

全部で幾らになるんやろう、と坂本さんの頭をそんな言葉が過ぎつて行つた。

あつと言う間に二週間が経ってしまった。本田さんは手慣れたもので、地図を一目見ると、その場所への最短の道が閃くようだった。着くと、鏡を見て、

どの大きさか、どこが不具合なのかを即座に指摘し、ボードにそれを書くよう指示をした。坂本さんがそれをボードに書くとき、本田さんが写真を撮つて、次に向かうので、予想通り自転車の乗り降り頻繁だった。

取り敢えず、身体はオーケー、作業もスムーズ、と坂本さんは次々に終わつていく地図を見ながら、嬉しそうな声を出すのだった。本田サマサマや、この人、傘寿過ぎてるのはほんまやろうか、とほくそ笑みもした。

天候が順調なのも幸いした。野外作業の大敵、雨が殆ど降らなかつたのだ。天気予報が雨天であつても、作業する午前中は降らないという幸運に恵まれていた。ラッキー、ラッキー、と坂本さんは心の内で、にんまりしていた。それでも、移動中に突然雨が降り出すことがあつた。新幹線のガード下で雨宿りをしていても、いらいらする坂本さんを尻目に、本田さんはゆつくりしたものだつた。止むまで待

とうホトトギス、と言いながら、雨に戸惑う人を眺めているのだった。

もう、四週間が過ぎようとしていた。仕事は頗る円滑に進んでいる。しめしめだけど、昨日から腰スコフと膝がちよつとなあ、と坂本さんはぶつぶつと呟きながら、仕事に出かけた。行つてらっしゃい、と珍しく門口で見送る奥さんの声が、妙に快活で生気に溢れているような気がした。居てないと機嫌が：：なあ、難儀なこつちや、とやるせない思いが湧いてくるのだった。

いつものように、九時から二時間ほど調査をして、次に向かう途中で、一息つこうと坂本さんが本田さんに声をかけた。

「そろそろ、油売りタイムですけど。売りませんか」  
「そやなあ、売るか」

「あの辻を曲がったところに、神社がありましたよね。あそこで、どうです？」  
「ええね」

ペダルをちよつと踏むと神社に着いた。境内で、グランドゴルフをしている人達を見ながら、小さなベンチに二人は坐つた。

海に面している日町には、住吉と名の付く神社が数か所あつた。今坐つている所は、その中で、最も大きな場所であつた。鳥居から社殿まで数十メートルの距離があり、木々の間には結構広いスペースがあつた。そこが高齢者のちよつとした溜り場になつていた。この町も、やはり高齢者は多い。ごく最近の統計では、六十五歳以上の比率が二十四%を超えているそうだ。

「ここ、落ち着くなあ。そやそや、サカちゃん、腰、痛いのと違う？」

本田さんが柔らかな声を出した。最初の内は坂本さんやつたなあ、それから、坂本くん、今日からサカちゃんになつたわ、と坂本さんは心の内で微笑んだ。一口喉に流した飲物が何故かいつもより温かいような気がした。容器を口から離して横に

置き、本田さんの方を向いた。

「痛くなつてきましたわ。腰だけやなく、膝もですわ」

「そうやろうなあ。僕も、同じや」

「そうですね。そうは見えませんけどね」

「そう、見せへんだけや。やせ我慢やがな。帰つて坐つたら、一言も喋らんと、じつとしてるでえ」

本田さんがそう言い終えた時、あつと言う声に向こうの方で聞こえた。目をやると、ボールが足元に向つてゆつくり転がり、ほんの手前で止まつた。

グランドゴルフをしている十名ほどの人たちが、こちらを見ている。ほんの何秒かが経過した。彼らはやはりじつと見ている。坂本さんがボールを拾おうとした時、本田さんの手が静かにそれを制した。「そのまま、そのまま」

聞こえる筈もない会話が聞こえたのだろうか。一人の男性がゆつくりこちらの方に歩いて来た。無言でそれを拾うと、直ぐに向きなおり、「同じ、年

寄りやないか……」と小さな声で吐き捨て、仲間の方へ歩いて行つた。

「きつと、『拾うてくれても、ええやろう』つて、言いたいのやろうね」

「そうですね」

「それが嫌やねんなあ」

本田さんのそう言う意味が、坂本さんには即座に理解できなかつた。単にボールを返す、こんな些細な事に目くじらを立てる必要はないと思つた。『泥が付いているから、拭いて返せ』と言われれば、ちよつと待てや！ となるけれど。

坂本さんは横に置いた飲物を再び手に取つて口に含んだ。向こうの方では何事もなかつたようにゲームが再開されていた。

「どこか、本田さんらしくない気がするんですが、どうですか」

「そうかなあ」

「そうですよ」

思いのほか暖かな秋の陽が二人を包んでいる。疲れた身体に、木々の間を抜ける微風が心地良い。坂本さんは直ぐに言葉を繋いだ。

「球技は大嫌いだとか……昔、何かあつたとか……」

冗談交じりにそう言いながら、本田さんの顔を坂本さんはじつと見つめた。

「いや、別に何も無いよ。一言で言うと、親切を当てるなつて事なんよ。年寄りには余計にそうや。甘えたら、あかんのよ」

「なんで、ですか？ 弱い者はイダ勞われるべきでしょ」  
「そうですね。子供や年寄りは……なあ」

一方で当てるにするな、甘えるなど言い、その一方で勞わられるべきだと言う。筋が通りませんけど、と思ひながら坂本さんは頭に手をやつた。ちよつと首を傾けて、本田さんを見つめた。

「やつぱり、何かあつたんや」

「いや、ないつて。ただ、親切にされ慣れてるやろ、近頃の年寄りは。例えば病院に行くとする。看護師

が『はい、お爺ちゃん、お注射ですよ。お腕、捲りましょうね』猫などで声でそうされているのを見るやろう。『はい、腕上げましょうね。そしたら、このベッドに寝るんですよ』まるで、幼い子をあやすように言っているのを、整形へ行つたら、聞くやろう。あれ、優しさやないように思うねん。どこか調教されてるように思うんや、自分らの扱い易いように。まあ、思い過しかも知れんけどね。要は、自分でできるうちは、自分で、せなあかん。しようとする意思を幾つになつても、持たなあかん。そう、思うだけなんやけどなあ』一気に本田さんは喋り終えた。

『自分の事は自分でする』は当り前の事だ。今更という気がしないでもない。物事に慣れて当てにする気持ちは甘えに通じる気もする。かといつて、甘えがいけない事だとも坂本さんには思えなかつた。俺なんか、誰かに甘えつばなしなんやけど、と坂本さんは思い当たる人達を頭に浮かべていた。奥さんやろう、それから、そやそや、一番甘えてるのは自分

にやなあ、と思つた時、本田さんと目が合った。向こうの方から柔らかな風に乗つて、先程の事がなかつたかのように、幾つもの笑い声が聞こえてきた。

「何か、考えてるのと違う、サカちゃんは」

「要するに、過ぎたらダメよつて事でしょ」

「そうや。適当に、甘えるのは、ええねん。慣れたらあかんつて事や」

「あーれ。TVのコマーシャルでやつてなかつたですか」

「のど飴やろう」

「そや、そや、それや。小太りの小さな演歌歌手でしょ。ナメタラアカン、ふふふ」

多少節を付けて、坂本さんが吹き出すように言葉を返した。

「落ちが着いたとこで、そろそろ、油売り、止めようか」

「ほな、本業、始めましようか」

坂本さんが言つて立ち上がると、本田さんも立

ち上がった。よいしょ、とどちらともなく掛け声をかけて自転車の方へ向かった。これだけ働いていたら、さぞかし今年の紅葉は鮮やかに思うやろうなあ、と坂本さんは脈絡のない事を考えながら、小さな声を出していた。

対象の地図の枚数が減っていくのに反比例して、腰や膝の痛みはどんどん増してくる。奮闘やなしに、苦闘やないか、と苦笑いを浮かべる事もしばしばだった。それでも坂本さんは頑張っていた。本田さんが発奮材料だった。しんどくなると、傍にいるこの人を見る事になっていた。自転車の重いのは事実であつても、踏むペダルは軽くなつたような気がするのだつた。人間、気のもんなかなか、と坂本さんは不思議に思うのだつた。

その日も本田さんと合流するため、八時半過ぎに家を出て、事務所に向つた。堤沿いを走つて十五分程度の距離だ。当分は自転車に乗りたくないなあ、と坂本さんは何気なく思った。やれやれ、もう、

何週間過ぎたんやろう、と頭の中で指を折つていった。小指は上を向いた。六週間なんや、と坂本さんは新しい発見でもしたかのように呟いた。

ほかの事考えたらあかん、危ないで、ここは歩いてる人が多いから、と思い直して、速度を緩めると、ちよつと前方にいる三人連れが目に入った。彼らは道幅いっぱいには広がつて歩いていて。女性の複数は多いのに、珍しいなあ、ええ歳そうな男性のお喋り三人組や、と坂本さんは小さく声を出した。彼らは横に並んで楽しそうに話をしながら歩いていて。困つたよ、どつちかに寄つてくれへんかなあ、と思つて坂本さんは三人の真後ろに自転車を向けた。何秒かしても、どちらかに寄つてくれる気配はない。大きな声を出して笑っている。坂本さんほもどかしさが募つてくる。こんな時はほんの数秒が途方もなく長い時間に思えてくるものだ。坂本さんはイライラしだした。一声出そうとした時、三人の中の一人が振り返つた。

「さつきから、うるさいなあ。開けたるから、はよ、行き」

「なんやてー。開けたるやないやろ。どうぞ開けますやろう。常識やろう。あんた、幾つや」

坂本さんが自転車を止めて、いつになく言い放つた。大きな声だったのだろう。驚いたように残る二人も振り返った。案の定、三人共、坂本さん以上本田さん未満の歳格好だった。言い過ぎたと後悔しつつも、こうなつては相手の反応を待つよりない。坂本さんは一応相手を睨んだ。

「悪い、悪い。行つて、行つて」と最年長と思しい一人がそう言つて、道を開けた。これ幸いと坂本さんは自転車に直ぐに乗り、彼らの前に出て、ペダルに力を込めた。

あの三人が悪い訳ではない。もう何十分かしたら、あの三人は一人ひとりになる。長い独りの時間を過ごす事になる。この僅かな時間が誰かと繋がっている唯一の時間なのだ。夢中になるのも仕方が

ない。妻や子とも離れてしまった。仕事や肩書とも離れてしまった。寄る辺のない人達なのだ。朝のほんの短い時間だ。周りを忘れたとて誰に責められようか。言いようもなく、せつない気分坂本さんは一瞬襲われた。

その途端、フフフ、と口元に笑いが浮んだ。こんな難しい話やあれへん、また、勝手に物語を作つていると坂本さんは可笑しくなつた。いつもの悪い癖が出たとも思つた。単に自分が短気なだけだ。相手の一言に目くじらを立てただけで、悪いのは自分なのだと反省もするのだつた。疲れているのかなあ、そや、本田さんが待つてる、と慌てて坂本さんは自転車のスピードを速めた。

腕時計に目をやると、もう七時を指していた。また寝たんや、と坂本さんは掠れた声で呟いた。街灯のぼんやりとした光が窓越しに射している。めつきり寒なつたなあ、うたた寝すると風邪ひくわ、と言

葉を漏らした時、不意に本田さんの顔が頭に浮かんだ。

「明日、県立病院へ検査に行つてくるわ」

「ええ、どこ診てもらいますの」

「ア、タ、マ。『空つぽです』と言われたりして」

「また冗談を」

坂本さんが簡単にそう返答した。いつもなら即座に言い返してくる本田さんが黙っている。どこか嫌な間マが続いた。

「あと、三枚やのに……、休んでしまつて、ごめんなあ」

いつになくしんみりした口調で、本田さんが小さな声を出した。坂本さんは詳しい事を聞こうとした。直ぐに、本田さんの声が後を追つてきた。

「連絡するから」

そう言うとき本田さんが後ろを向いて、ドアの方へゆつくり歩き出した。肩の落ちたジャンパー姿が妙に印象に残つた。

頭がどうのこうのとは聞いた事がなかった。この二カ月程は土・日以外、昼の十二時過ぎまで一緒にいた、偶の雨天の日は除いて。近頃では、世間話だけではなく、それなりに込み入ったプライベートな話もするようになっていた。奥さんへの愚痴をぶつぶつ言うとき、「そら、サカちゃんの贅沢や」とたしなめられもした。坂本さんは歳の離れた兄貴が出来たと思うようになっていた。

それにしても遅いなあ、連絡が、と坂本さんは携帯電話を手を取つた。あれ、また電源、切つているわ、と素つ頓狂な声を上げた。直ぐに電源を入れた。じつと画面を見ると、着信の音楽がなつた。メールが入つていた。もどかしげに操作してメールを開くと、案の定、本田さんからだつた。

『先生曰く、何も写つていません、こんなん珍しい、やて。逆に気になる頭の程度。心配かけてゴメンな。明日、いつもの時間、いつもの場所で』

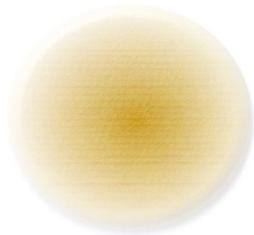
見た途端、坂本さんは胸を撫で下ろした。ふー

と息を吐いて、明日会った時にどう声をかけようか  
考えてみた。「良かったですね」はありきたりだ。「頑  
張りましょうね」は硬過ぎる。「一緒に出来ませ  
ね」これやなあ、と坂本さんは思った。

「時間潰しやなしに、時間使いやつた気がするわ、  
この二か月程は。腰や膝はがたがた言うてるけど

なあ。そや、そや、五年後はどうかなあ」と坂本さ  
んが思った時、困ったような本田さんの顔が目の前  
をよぎった。

了



夢

小野村 新

自宅の生け垣の山茶花が赤い花をつけた。里見隆一は顔を近づけて、その花を眺めてみた。中央の黄色い雄しべと雌しべを囲むようにして、小さな花弁の一枚一枚がピンクの深い彩りをたたえている。これまで、このようにしみじみと花など眺めたことなどなかった。一ヶ月前に定年退職で仕事から解放された心の余裕が、眼を花に誘うのだろう。

十二月も後十日、今年も終わりを告げる。「一年歳歳、花は相似たり。歳歳年年、人同じからず」。思わず、有名な漢詩の詩句が里見の口をついて出た。

花から目を離して顔を上げると、通りかかった自治会長の川端さんが、微笑みながら佇んでいた。花に顔を近づけて何事かつぶやいていた自分の姿を見られて、里見は少々気恥ずかしい気持ちにな

つた。

「山茶花の花は可憐で質素な感じがしていいですねえ。それに比べたら、桜は大変な花ですよ」

里見が、「それはどういう意味ですか?」と尋ねると、「今年の十月に公園の桜の木を伐採したでしょう」と言い、川端さんは最近よく見る夢の話を始めた。

里見の住んでいる住宅地は、戸数が百三十軒ほどの比較的小さな新興住宅地であった。古いプレハブの公民館が老朽化したので、子どもたちの遊び場として使っていた小さな公園を整地し、新しい公民館を建てることになった。この小公園は桜の季節になると花見を楽しむ人でにぎわった。しかし、公民館を建てるとなると、桜の木をすべて伐採する必要があった。自治会の役員が無念の気持ちで、チェーンソーを使い桜の木を切断、処理したという次第であった。

川端さんの見た夢というのは、このことに関する

ものらしかった。

何かの縁日らしく、孫が神社の奉納相撲大会に出場している。川端さんはそれを観戦するために、境内目指して奥さんと参拝路を上って行つた。坂を上り切つて平地状になつた当たりから、いろいろな屋台や露天がおいしそうな匂いを放つて道の両脇に並んでいる。鯛焼き、たこ焼き、焼き鳥、綿飴……。子どもの好みそうな各種のお面も、眼を引くように整頓され吊られて売られている。香具師や露天商が客に呼びかける威勢のいいかけ声や、それに応じる親子連れのはしゃいだ声。参拝路はおおぜいの人でにぎわっている。川端さんと奥さんも、いろいろな屋台を横目で観察するようにして歩を進めて行つた。

するとどうしたわけか、突然、参拝路が趣を変えたものに変化した。紅白の布で飾り付けられた二本の太い柱で門が設営され、その上部に「桜伐る

ばか、梅伐らぬばか」と大きな横文字が記された横断幕が張られている。変わったスローガンを掲げているな、と思いつながら門を入つて進むと、屋台はすべてが桜の苗木を売る店と化している。けつこう賑わつており、多くの客がよさそうな桜の苗木を物色している。川端さんが不審そうな顔を露わにして歩いていると、僧服を身につけた布袋さんの化身のようなでつぷりと肥つた中年男が、にたにた笑いながら声をかけてきた。

「ちよつとちよつと、そこのおじいさん。あなたは七本の桜の苗木を買つて帰らないと罰があたるよ」

「なぜ私が桜の木を買わなければならぬかのね。」

また、七本つてのはどういうわけだい？」

「おまえが七本の桜の木を伐つてしまつたからじゃよ。七本も桜を伐つたおばかさんは、桜の精の祟りで長生きできないんじや」

公民館建設のために伐採した桜の木のことだと気づいた川端さんは、自信たつぷりに返答した。

「あの時は、木を伐る前に、近くの神社の神主さんに祈禱してもらったんだよ。伐り終わってからも、それぞれの切り株に御神酒を注いでお浄めまでしたんだ。だから、祟りなどあるわけがない」

「おまえが依頼したあの神主は、祈禱中にくぐびをしたのじゃ。集中力を欠いた、あんな神主がお祓いをしたつて、何の効験もないのじゃよ」

それまで一言も喋らず様子を窺っていた妻が、布袋さん似の男に心配そうな表情で訊いた。

「長生きできないつて、主人は後どのくらい生きられるのですか？」

「あとどれくらい生きられるかはわからないが、七年寿命が縮まつたことだけは確かじゃ。桜の木に宿る神の祟りは恐ろしいのじゃよ。自宅の周辺に、それが無理なら川の土手でもよい。とにかく七本の桜の木を植えるのじゃ。それらの木が無事に成長したら、神のたたりも解けて、縮まつた七年の寿命を取り戻せるのじゃよ。少々値は張るが、この機会

に買って植えるのじゃ」

店頭には、大小とりどりの桜の苗木がずらりと並んでおり、一本一本に商標が付いている。一本一本丁寧に吟味して、どの木を買おうかと思案中の客もいる。すべての苗木が満開の桜の花びらで飾られており、華やかな雰囲気を漂わせている。

「どれくらいの値段の桜を買えばよいのでしょうか」と妻が聞くと、布袋さん似の男は、「一万円が三本、二万円が二本、三万円が一本、十万円が一本じゃよ」と、大きなはげ頭を撫でながら答えた。

「いくらなんでも、十万円は高すぎるよ！」

川端さんが大声を張り上げて抗議すると、布袋さん似の男は、太鼓腹を突き出すようにして言い返した。

「公園の入りにそびえていた幹の太い古木は、おまえの自治会の四十五年の歴史そのもので、十万円は値打ちに相当するものなのじゃよ！」

普段はおとなしい妻も、さすがにヒステリックに

怒鳴った。

「合計で二十万円！ そんな大金、持ち合わせていませんよ」

「今払えと言っているのじゃない。郵便局へ行つて、この桜樹保護協会という口座に代金を一週間以内に振り込んでくれればいいのじゃ」

布袋似の男は、一枚の振り込み用紙を妻に手渡し、豪快な高笑いを繰り返した。

「これは詐欺だ。新手の詐欺だよ！」

川端さんは、あらん限りの大声で訴えた。

「いつも、ここで夢から覚めるのですよ」

川端さんは、苦笑をもらした。

夢を見た時には、必ずうなされ、寝汗をびっしょりとかいていた。隣で眠る奥さんをそのたびに起こすことにもなり、自己嫌悪による悩みも深まって、診療内科に通院したそうである。

医師は、現在進行中の擁壁作業や土地の整備

が終了し、地鎮祭を経て無事公民館が完成すれば、そのような夢はすっかり見なくなるはずだ。それと、昼間にもつと運動をすべきで、たとえばウォーキングなどで快い疲労を伴った体で寢床に入ると、夢など見ないでぐっすりと眠れる。そうアドバイスしてくれたらしい。

「あの時には、桜の木だけでなく、金木犀や紫陽花の木も伐つたのですが……。不思議な木ですよ、桜というのは」

川端さんは、ずいぶんと気苦労の多い自治会長という役職を五年間も務めている。年を追って自治会活動が活発になってきているのも、川端さんのリーダーシップに負うところが大きい。こうして話しているも、誠実な人柄がその物腰から伝わってくるような人なのである。

「それじゃ、……」右手を挙げて帰って行く川端さんの後ろ姿に、後五年して自分も至る古希という年齢を見出し、里見は大きなため息をついた。

## 「阿倍野友之・石川希理対談」

三月三日居酒屋にて

本日のテーマは新しい文明論です。

石川　こんにちは。この対談のおかげで、先生とは三ヶ月に一度お会いしています。

阿倍野　そうですね。ありがたいことです。なかなか「こんどあいましょうか」といつても具体的には実現しませんからね。

石川　本日のテーマは大上段に文明論です。特に日本文明。

阿倍野　難しいですねえ。私は一応、評論家、駄文書きではあるのですが、ちよつと持てあましそうです。

石川　アクトスには哲学科卒という方がおられて、私が先生のお相手をするよりそちらの方がいい気もするのですが、思い切つて…。

阿倍野　まあ、文明や哲学といった言葉は明治維新からでしょう。使われ出したのは…。

石川　え、そうなんですか？

阿倍野　西洋の事物がどつと流入してきたのは明治維新以後ですから、西周にちあまねさんなどが造語していった。

「哲学」「帰納法」「演繹法」「真理」「命題」「習俗」「心理」「物理」「取引」「消費」「芸術」「理性」「科学」「技術」「宗教」なんかがそうですね。

石川 あ、昔からあると思っていたのですが、よくご存じですね。

阿倍野 対談のテーマが決まってから少し調べてメモっています。

石川 すみません。

阿倍野 いや、私も勉強のし直しになりますし、存外知らないことも多くて助かります。

石川 文明と文化は違うのですか。なんとなく判るのですが。

阿倍野 世界四大文明、エジプト・メソポタミア・インダス・黄河というのは、「文明」といわれますね。「文化」は、「文化会館」なんて使われるように、地域限定。

石川 そうですね。「文化会館」なんて、そこら中にありますね。「文明会館」とはいわない。(笑)

阿倍野 まあ「文化」は精神的な要素が強く、「文明」は技術的で具体的、そして文化に比べて広い概念ですね。でもあまり二つにこだわることもないでしょう。ただ「四大文明」は現在でも学習指導要領にあるらしいですが、もともと政治的に作られた概念ですね。現代では学術的に否定されています。使っているのは東アジアだけ。もつと複雑多様ですね。

石川 えっ！ 「四大文明」って世界中で標準的に使われているのかと…。

阿倍野 地域限定ですね。(笑)

石川 知らなかった。

阿倍野 多いですよ、そういうこと。例えば「世界三大宗教」ってご存じですよ。

石川 はい。「佛教・イスラム教・キリスト教」ですね。

阿倍野 ですよ。私も最近まで、世界三大宗教は「佛教・イスラム教・キリスト教」と思っていました。欧

米などでは「ユダヤ・イスラム教・キリスト教」というケースもありますし、「ユダヤ」の代わりに「ヒンドウ」を入れる場合もあります。信者数は九億ですから、佛教より多い。でも「ヒンドウ」も地域限定ですね。

石川 地域限定が今日は多いですね。(笑)

阿倍野 ええそうですね。少し脱線しますが……。

石川 どうぞ、脱線して下さい。

阿倍野 「四大文明」のように数字が現れるものは気をつけないといけません。数字になると見た目も聞いた感じも「確実」と思えますからね。もちろん確かなものもありますが、数字マジックも多いのです。

石川 マジックですか？

阿倍野 ええ、例えば「人は見た目が9割」という本があります。大ヒットして売れましたが、6割の人が「なんだ買わなければよかった」と思っている。「6割」の「6」も数字マジックです。はつきりしますよね。「多くの人が」とするとぼんやりする。「人は見た目が9割」なんていう学術的データはないのですが、そう書かれると「確かに見た目、男前、美人は得だよなあ」と日頃思っているから飛びつくわけです。この本はタイトル勝ちですね。「〇歳までに」とか「なににの25の方法」とか「7日間で」とかいわれると納得してしまう。石川 そうですね。私なども本などの場合、数字があると目がいってしまう。

阿倍野 まあ少し脱線しましたが、例えば中国では、黄河文明に先行し、或いはほぼ重複しつつ、長江文明が発見されています。最下流部の異称が揚子江ですね。この文明は鉄器を持った黄河文明に滅ぼされ吸収されますが、稲作を中心とする文明です。四大文明は小麦文化ですが、あ、この場合文化は文明の下位概念としての使い方ですね。長江の場合は稲作文明ですね。ちよつと脱線しますが……。

石川 脱線の脱線ですね。(笑)

阿倍野 すみません。文明の基礎となる経済の中心が、稲作というのは、文明に大きな影響を与えていると梅原猛先生なども常々いわれています。例えば、先ほどの宗教で、キリスト教もユダヤもイスラムも狩猟文化、小麦文化ですね。ところが、宗教ではないですが儒教や、あるいは佛教は稲作文化です。お釈迦様のお父さんば浄飯王という名前で、正に稲作ですね。小麦と違って大量の水と太陽が必要で豊かな実りをもたらす稲作は、人の精神文化に大きな影響を与えるのではないかと私は睨んでいます。さて、話を元に戻して、現在の学者は、二十一世紀の文明というものをどう捉えているか、幾つあるのかといったことから考えてみましょう。

石川 幾つあるのですか。

阿倍野 サミュエル・ハンチントンは、アメリカ合衆国の国際政治学者ですが、『文明の衝突』の中で、「西欧文明・イスラム文明・東方正教会文明・中華文明」とまず大きく分けています。

石川 東方正教会というのはギリシア正教などですか。

阿倍野 ええ、ロシア正教会・ギリシャ正教会・ルーマニア正教会といったところですね。

石川 お恥ずかしいですが、つい、数年前まで、キリスト教というのはカソリックとプロテスタントに大きく分けられると思っていました。なんとなく似た民族宗教みたいなものがロシアなどにあることは知っていましたか……。

阿倍野 小室直樹さんの「日本人のための宗教原論」は批判のある本ですが、読んでみられてもいいかと思えます。キリスト教がローマを中心としてラテン語の聖書中心にまとまったのに対して、東のギリシアやロ

シアへは、その地方の言語を中心に土着化したというんですね。それをまとめて東方正教会。

石川　するとハンチントンの四つの文明は宗教的にはキリスト教とイスラム教ですか。中国は佛教ではない。阿倍野　まあ、いわゆる西欧のキリスト教と東方正教会を、一つのキリスト教と見る学者もいますし、大枠ではそれでいいかと思えます。

石川　すみません。素人の自己判断です。

阿倍野　佛教も釈尊の教えそのものを守る上座部仏教と、飛躍した大乘佛教がありますが、もの凄く大雑把に言えば東方正教会はキリストの元々の教えに後から色々付け加えていないという点では上座部仏教にあたるでしょうか。

石川　ここであまりこだわってもいいけません。無知から変な話になり済みません。

阿倍野　私も同じですよ。常に自分は正しいのかと意識することが大切なのです。

石川　正しいも何も、知らないことだらけで愚者です。ま、頭の中がぐしゃぐしゃ。(笑)

阿倍野　私もお話をさせてもらっていると、自分の至らなさに愕然とします。しかし、それは置いておくとして、確かにキリスト教、イスラム教というものが文明としてのまとまりの大きな要素ですね。

石川　佛教は入らない。

阿倍野　ええ、先に稲作文化と文明、宗教に触れましたが、キリスト教、イスラム教は唯一絶対神信仰です。ユダヤ教ですが、聖地がエルサレムで同じ、同根宗教といういい方もできる。小麦と遊牧が背景にあります。孔子と佛教は、稲作。イスラムとキリストは、他を認めないので文明圏と言うものが強固にできあがる。佛教は後に出てくる大乘佛教で、大日如来とか阿閼佛、阿弥陀仏、薬師佛などというそれぞれが自分

の範囲で浄土という国を造つて持つ絶対神になる。もちろん人を作りませんからイスラムやキリスト教と比べると、力の限定された小さな創造主です。また多すぎる。それで強固な文明圏の基礎にならない。そしてもともとのお釈迦様の教えは、「仏道・仏法」といつて総ての基礎になる生き方・考え方ですから、神に造られて助けてもらうという一点に収斂する宗教ではない。第一、聖書やコーランという統一された聖典もないでしょう。明治時代に「religion」という言葉を「宗教」としたり、「仏道・仏法」を「佛教」と珍訳した結果です。

石川　それでハンチントンの「西欧文明・イスラム文明・東方正教会文明・中華文明」のなかに、文明の大きな要素を占める宗教として佛教の存在がないのですね。

阿倍野　そうですね。ハンチントンのいう文明の中で中華文明は宗教のバックボーンがなく、また稲作文明であるというのおもしろいですね。概ねインド辺りから東南アジア、東アジア。インドネシアやフィリピンはイスラムとキリストなどが入っていますが、大体その辺りが中華文明圏ですか。

石川　南・東南・東アジアというのは不思議な地域ですね。ヒンドゥーと上座部仏教ですか、昔は小乗佛教といいましたね、それに孔子、大乘佛教。大乘佛教は実質的に日本だけになりました。中国は共産国家で思想的には佛教は大きくないですし、韓国はキリスト教の方が強い、儒教も強い。日本だけが独特の大乘佛教国。

阿倍野　いい点をつかれましたね。ハンチントンは日本文明を中国とも違う、世界の大文明のひとつに比すべきものとしてあげています。異説もありますが、ハンチントンは文明の衝突する世界を予想しています。その文明の一つが日本です。なんと世界の文明に互して独立した文明なのです。孤立文明といえます。

石川　　なんだか自慢したいような、むずがゆいような。でも何故そんなことになったのでしょうか。

阿倍野　　たぶん地理上の特殊性でしょう。中国大陸とは、随分離れている。朝鮮半島と九州は近いですが、それでも対馬があるものの二百キロ。イギリスとフランスの距離は五十キロですからねえ。ドーバー海峡を泳いでというようなイベントもある。それに比べると、大陸と日本の交流は近代以前は非常に難しい。古代・中世時代、いのちがけの遣唐使などがありました。それをやめてしまうと国風文化がおこる。時代が下って江戸幕府が鎖国すると現代日本の文化の基礎となる事柄ができはじめる。もちろん大陸や他の世界と細々とした交流はありますが、『魏志倭人伝』や『漢書地理志』にありますように、『楽浪海中に倭国あり』となるのです。朝鮮の先の絶海の孤島、その野蛮人という意味の倭人、それが日本なんです。孤立しているのです。面白い風俗の指摘がありますよ。私たちは時代劇をよく見ますから慣れているのですが、あのチヨンマゲや女性の髪。武士から町人、農民まで妙な頭です。世界には弁髪や、モヒカンのような頭もあります。数が少なく、男性だけであつたりします。民族あげて長期間珍妙な頭は珍しい。まあそれはともかくそれ以上に大きいのは自然環境でしょうか。四つの大陸プレートがぶつかる激動の地です。糸魚川静岡構造線、フォッサマグナという大地溝帯は日本列島を二つに折り曲げつつあります。したがって大地震、津波は頻発する。そして火山、なにせこの小さな国、世界の国の全面積の〇・三%ほどのところに十%の活火山がある。桜島はあの周辺の海が大火口でしょう。阿蘇山なんか外輪山という大火口の中に町があり鉄道が走っている。それが爆発すれば火砕流は九州をほぼ覆い、近畿まで五十センチの灰で埋まるという。日本人は大災害の中の束の間の時を生きているのかも知れません。そして台風がある。夏と冬の温度差が三十度にもなる国土。短い急流の川、狭い耕地となると、総て儂く脆い。しかしその中で忍耐強く、温和し

く懸命にいのちをつなぐ民族が生まれたのです。権力闘争はありましたが、農民達は基本的に争わない。稲作は協力を要請されます。そして度々襲い来る天災は諦めに転化する。超越的な自然の中にあつて、それと調和し、自然の中に生命を生かす神の力を見ているのです。なるほど、この世は穢土であつて極楽へ行きたいという浄土教が興り、長く受け継がれてきた背景がそこにあります。釈尊の佛教とは断絶しています。大乘佛教は釈尊の教えを敷衍していったといいますが日本では完全に固有の宗教に変わつてしまつています。だから、孤立文明なのです。

石川 ただ話をお聞きしていて、粘り強く、争わず強調して生きる。あらゆるものを取り入れて消化して血肉にする。猛り来る自然に耐え、生き抜いていくという文明は、ひよつとすると……。

阿倍野 ええ、これもそうですね。気づかれましたね。イギリスの作家アーサー・C・クラーク、あの『2001年宇宙の旅』という映画の原作者ですが、別に『幼年期の終わり』という傑作を著しています。この作品は地球人類の未来を描いたSFです。人類が幼年期から成長するというお話ですが、現実にも人類は「人間という種」の幼年期の終わりを迎えるつあるのかも知れません。そんな気がします。そして青年期になる過渡期としての思春期にさしかかっている、それはいわば大人への関門ですね。この幼年期の終わりを上手く乗り越えられないと、いきなり人類は「老年期の終わり」つまり、滅びの時を迎える、私はそんな不安も少し持っています。科学文明が発展して、豊かになり、病気は克服し、バラ色の未来、というより「よくなるだろう」という淡い期待を持つて迎えた21世紀でしたが、中国という自由のない国が凄いで巨大化し、ヨーロッパはEUが上手いかず、老朽化して不安定になつている。キリスト教は力を失い、イスラム圏ではISIS・ISIL、アイシス、アイシル、イスラム国という名称もまだ混沌としているような出来事が起こつて

いる。日本も巻き込まれて、後藤さんや湯川さんという痛ましい犠牲者がでた。科学技術の発展は漠然とした期待感を持たせませんが、一方、環境破壊や温暖化は急速に進んでいる。その中で、総てを吸収しつつ独自の文明を打ち立てた日本という国、孤立文明は、ひよつとすると人類がこの困難から抜け出て、青年期を迎える鍵を握っているのではないか、些か我田引水ですがそう思うのです。

石川 私もそう感じてきました。ちよつと嬉しいような、期待するような願望、しかし、思い違いでもあるような妄想、確信が持てません。

阿倍野 客観的に眺めてみれば如何ですか。なにより、この狭い国土に多くの人がいることが「共生」の証拠です。江戸という都市は十八世紀初頭には百万人を超え、当時のイギリスのロンドンより人口が多かった。江戸末期の日本人口は三千万人、七十年前の第二次大戦末期には六千万人、現在は一億三千万人。山ばかりの狭い平地にこれだけの人が住んでいる。しかも、冬がある。衣食住の備えが十分でないと寒さで減んでしまう。熱帯や亜熱帯のように二期作が可能ではない。人と人が譲り合って暮らしている。オマケに厳しい自然を乗り越える結果としてでしょうが、江戸時代の識字率は世界最高という具合に、教育程度も高い。

石川 琉球征伐、アイヌ人への迫害や、台湾、朝鮮の植民地化、東・東南アジアへの戦争といった負の歴史もあります。なるほど急速に近代化して西洋に追いついて追い越した歴史というのは、日本人のきまじめさ、勤勉さ、共生といった特質が支えているのですね。

阿倍野 そうですね。もともと世界中の災害を一人で引き受けたような地理的位置と空間、狭い耕地と豊かな森、はつきりした四季のある国、すべてのものに神や精霊を見る国、弥生時代から水と太陽と、協調・

共同の稲作に親しんできた国。儒教や佛教を取り入れつつ、それを独特の形態に変化させた国。なにより「わび・さび」という感覚、「ものあわれ」という心、そして「チョンマゲ」などというユニークな文化を持つ国。石川 私は晩年になって佛教大学で浄土教中心に佛教を学びましたが、それも日本文化ですか。

阿倍野 大乘佛教が行き着いた先に日本があつて、浄土宗・浄土真宗・日蓮宗・禅宗、もちろん以前からあつた天台宗や真言宗に密教などと、それぞれ信仰の対象も考え方も違うユニークさですね。しかも各々の教団がまた数えられないような多さの分派に分かれている。もう多神教ですね。怒られそうですが、大きな目で俯瞰すると、総てのものに神や精霊が宿るアニミズム、八百万の神々のおられる神道と同じだと考えています。例えば、初詣は近くの神社に行く。どのような神様か知らない。伊勢神宮にも行くし、出雲大社にも出かける。それと同じと考えていいのではないのでしょうか。確かに、平安時代末期から鎌倉期にかけては、それぞれの宗派が「自分のみが正しい」ということでした。世の中が乱れ、京都の鴨川の河原には死体がち捨てられる。無常です。どうしようもない無力感の中で何かにすがりたい。その時代の日本佛教は、神々の争いみたいなものでしょうか。

石川 私はお釈迦様の教えが、日本に伝わっていないことを学びました。中村元博士が『スッタニパータ』という原始仏典を説明されていますが、これは『アーガマ』という漢訳では『阿含経』にも入っていない。学術的には最古の經典で、お釈迦様の教えの核心がここにあるらしい。それが中国にも朝鮮にも、そして我が国にも伝わっていないのには驚きました。

阿倍野 だから、最澄も空海も、法然も親鸞も、日蓮も、栄西、道元も知らないのです。一切経の中に入っていないから知りようがない。ただ、そこから派生した大乘佛教の教えの中に含まれているのですが、相当変

質はしています。

石川 一神教みたいになつたというお話ですか。

阿倍野 ええ、この世は穢土だから南無阿弥陀仏で極楽へ、或いは南無妙法蓮華経で仏国土に生まれる。この考えは、当時の悲惨な社会から逃れたいという庶民の願いがあるわけです。難しいことをいつて修行しなさい、自立しなさい、努力しなさいといつても、学問もなければ毎日の生活も困難な中では通じない。単純化したわけです。千年経つて、社会状況がガラリと変わり、豊かで食べられる、知識もあるという社会では、もともとのお釈迦様の教えである「人生の意味は」「どう生きるべきか」を個々人が考えて努力出来るようになった。この考えは鎌倉時代の法然も親鸞も、日蓮も、栄西、道元も知らない。

石川 彼らが学んだ天台、比叡山では難しい教えをしていましたね。

阿倍野 宇宙そのものが大日如来で、総てのものに仏性がある「山川草木悉皆成仏」ですか。またあるいは「本覚思想」といつて総て本来わが身に「さとり」がそなわっているから気づかないといけないという教え。これなどは一神教ではないですが先ほどもいったように、当時の混乱する、しかも貧しくて知識もない庶民には通用しませんから見捨てられましたね。

石川 現代はその思想が大切だというわけですか。

阿倍野 少し難しくなりますが大乗佛教の「空」とか「唯識」とかいうものを踏まえていますからね。「山川草木悉皆成仏」なんて、今の世の中を救うような考え方です。ただ、お釈迦様の根本的な考えを相当逸脱して肥大化してしまっている。

石川 「空」や「唯識」というのは佛教の根幹と学びました。

阿倍野 単純に大胆にいいますとお釈迦様は「この世は苦である」「我々の存在は非我である」「執着せず」「自己をコントロールして善く生きなさい」といわれていますね。

石川 その中の「非我」というのは初めてうかがいました。

阿倍野 すみません。次第に難しくなりだしました。説明は少し大変になり長くなります。

石川 そうですね。善く生きる生き方というと、死に方とか、死の世界の話になる。

阿倍野 ええ、「死」の問題に関しては、お釈迦様は「不知」、知らないど、形而上の問題には踏み込まれていません。じつはお釈迦様はこたえておられるのですが、それはまた長いお話になる。

石川 ああ、すみません。随分と時間をとりました。残念ですが、その話はまた機会がありましたら伺いたいと思います。今の私は早くお聞きしたいのですが……。

阿倍野 そうですね。文明論のお話でしたが、人類を新しい段階に導く思想というのは、その辺りにあるのではないかと思えます。

石川 ただ、現代文明というのが、行き詰まりにあるのは事実で、それを打開する道を考えないといけないのでしょね。

阿倍野 そうですね。一人ひとりが吟味して、考えて、そういうことのできる時代になっていますから、他人任せにしないで、思惟していきたいですね。

石川 ぜひまた続きをお聞かせ下さい。ありがとうございました。

◆サミュエル・フィリップス・ハンティントン「Samuel Phillips Huntington」1927年4月18日―2008年12月24

日)

◆梅原猛(1925年3月20日ー)哲学者。大学教員・学長を歴任。国際日本文化研究センター所長、社団法人日本ペンクラブ会長。文化勲章受章。

◆小室直樹(1932年9月9日ー2010年9月4日)経済学者、法学・法社会学者、評論家。東京工業大学世界文明センター特任教授、現代政治研究所長など歴任。

◆文明ー宗教・倫理・道徳・学術・芸術などの精神的な文化に対して、技術の発達や社会制度・仕組みの整備などによる経済的・物質的文化をさす。「文明」の中に「文化」を含むが、広義の「文化」は「文明」も含むので同義として用いられる場合も多い。



ロスト

毎日が目まぐるしく動いて

慌ただしさをただ捌きながら

今日も一日が終わりを告げていく

電車で、バスで、徒歩で、

家へ、酒場へ、盛り場へ

胸を張っていく人、背中を丸める人

僕、僕、僕、私、俺、僕、俺、俺、私、私……

大西  
隆史

ごつた返した人々は何を信じて、何を目指して歩いているのだろう

繰り返す行き詰まりの中で自分を見失いそうになる

矛盾を目にして憤った自分と、矛盾の渦に飲み込まれていく自分と

同じ自分なのだろうか

大人になるという事は何かを捨てる事だ、なんて腐りきった台詞を自分に言い聞かせる日が来る事を、あの頃の自分は知っていたのだろうか

人間として生きる時間が長くなれば、そのうち愛とか友情とかいったものは理解出来るはずなのだろうが、いつまでたつても、何年人間を続けても、愛なんてものは、友情なんてものは僕には分からなくて、恋人に好きだよと囁く事に嫌悪して叫ぶ日々だけが続いていて、失われたいく友達？にしがみつこうとする事に心を裂かれて、自分をごまかす事ばかり上手になつている、あなたは誰ですか

一生懸命頑張る自分

部屋の中で身動きすらとれずに一日が終わる自分

友人に囲まれ笑う自分

相手の気を損ねないように諂う自分

異性を好きになつたと思う自分

相手を分析して好きの理由を探す自分

どの自分が自分であつて自分でなくて、どれが本当でどれが嘘で、矛盾がじわりじわりと手足の先から這い上つてきて、もうすぐ、息が、できなく、なる



優しさのかたち

大西 隆史

人は生きていくと、ぼろぼろと優しさを落としてしまいます

優しさが落ちていつて空いた隙間には、尖った気持ちがあざんどん詰め込まれていくのです

尖った気持ちはだんだんと、心から優しさを削り取っていきます

毎日、毎日、

優しさを落としては、尖った気持ちばかりを溜め込んで、また優しさを落としていく、その繰り返し

優しさが底をつき始めると、ぶつくさ、ぶつくさ言い始めます

ちよつと肩がぶつかつた、ぶつくさ

ちよつと足を踏まれた、ぶつくさ

ちよつと水がはねた、ぶつくさ

ぶつくさ、ぶつくさ

優しさは落とすばかりで拾えないから、どんどん、どんどん目減りします

でも時々優しさをくれる人が居るのです

おはよう、こんにちは、こんばんは、お元気ですか、ごめんなさい、ありがとう、お怪我は無いですか、足下をよく見て下さいね、どうぞお先に……

なあんだ

ほんの少しだけ立ち止まって

ほんの少しだけ相手の目を見て

ほんの少しだけ気遣って

ほんの少しだけ口を動かして

ほんの少しだけ手を差し伸べる

こんなに簡単なことで優しさは補充されて、がたがたになった隙間に、また優しさが詰め込まれる

ほんの少し、ほんの少しでいいのだと、中々気付かないもので  
ちよつとずつの優しさが、輪廻転生、まわることで、世の中が、少しずつ滑らかになる、そんなことを、期待しているのです、優しさのかたちに、気付くことを



平成二十六年NHK全国俳句大会入選

彩さい

華はな

干蝟や透けて夕日の沈みゆく

湖北へ

明花

「雪見船」という美しい名前の船がある。神戸や大阪から言えば琵琶湖の入口、大津港から彦根港、長浜港へ走る季節限定の船で、琵琶湖汽船のホームページでは、季節のイベントクルーズと記されている。

JRの構内のラックに『冬の関西1デイパス』というチラシの文字が目に入ったのは一月下旬。このパスは西は播州赤穂や上郡、東は敦賀、南は奈良、和歌山まで、一日乗り放題三千六百円という、なかなか使いやすい

ごたえのある一日乗車券なのだ。

しかも同じチケットで、京阪電車にも、そして大津港から長浜港まで片道三千円もする雪見船にも乗ることが出来るという。

調べてみると 西明石、山科 千九百四十円。山科、浜大津 二百四十円。雪見船三千円。長浜、西明石 三千二百円。

これが全部で三千六百円なら、もう一度、美しい雪を抱いた峰々を観ながら琵琶湖を縦走してみたいものだど、心惹かれた。二〇一三年の三月三日。大津市に住む従姉が誘ってくれて二人で「雪見船」に乗

り、早春の琵琶湖を遊覧したのだった。当時従姉は、彼女の父親、つまり私の伯父の看病で心身共に疲れており、私は私で仕事のことでも思い悩む日々を過ごしていたこともあり、「日常から離れてリフレッシュしよう」と即決で小さな旅に出たのだった。

同年七月に伯父は亡くなった。翌二〇一四年八月にその従姉もガンで旅立った。享年五十四歳。発病から十五年を経過し、健気に闘い、病と共存しながら生を全うしたのだ。私たちは同じ年に生まれ、一人娘の彼女と女兄弟を持たない私は、文字どおり姉妹に準じるという「従姉妹」同士。そして得難い友でもあった。

彼女のことを思うと、今も湧水のように涙が溢れてくるので、「もう一度、行きたい」という思いと「さみしい思いをするだろうな」とずいぶん葛藤したが、二人で過ごした時間、風景をもう一度辿つてみたいという思いが勝った。

それは、彼女の骨を琵琶湖に散骨しているからかもしれない。そしてその理由を知つていて同行をしてくれる友人があり、思い切つて出かけることになった。

二〇一五年二月二十一日。

「暖かい服装で」と打ち合わせメールをしたものの当日は、気温十四度、澄み渡つた青空。ぽかぽか陽気でコートも手持ちするほ

どの穏やかさに「私たち、普段のおこないが  
良いのよね」と定番の発言が飛び出して笑  
顔の出演となった。

でも、私は内心、優雅で美しい雪山が見  
られるのよとアナウンスしていたのに、雪山  
がイマイチ綺麗に雪を抱いてなかったら困  
るな、と、妙なドキドキ感に溢れていた。

西明石発七時四十五分の新快速で山科  
へ。京阪・山科駅の改札にはJRの同じチケ  
ットを持った人達が乗車券を交換している。  
ざつと二十人程度。そして浜・大津で下車し、  
大津港の雪見船に乗るのだから、『冬の関  
西1デイパス』の威力はすごいのだ。

もうすでに人が並んでいる。大津港のゲ

ートをくぐると「ドラ」ならぬ教会のベルの  
ような鐘があり、大人も子どもも遠足気  
分で鐘を打ち鳴らしながら乗船していく。  
いかにも楽しげだ。

大津港十時出船。

そうそう、この船だった。そう、あの日と同  
じ風景。比叡の頂きにも雪が見える。友人  
は程よい距離感を保つてくれているので、気  
を使うことなくどんどん自分の世界に入っ  
ていく。

あの時はほとんどお客さんもなく、船の  
二階で進行方向右側の席に座り、従姉が  
「美味しいパンを買ってきたわ」と準備万  
端。包みを開け、自動販売機で買った温か

いミルクテイを飲みながらおしゃべりを始めたのだった。

「病院から電話がかかつてきたらどうしよう」と、片時も伯父のことが心から離れられない彼女に「もし今、何かあつても長浜までの二時間半は、どうしようもないわ」と容赦ない言葉をかけた私に「ほんまやなあ」と相槌を打つ。

「どんなに頑張ろうつて思つても、なんや力が出ないのよ」と弱音を吐く私に「今は冬やん、芽吹く季節と違ふんやから、仕方ないわ」と漢方や鍼灸、東洋医学的な考え方がお気に入り私たちは「そうやなあ、しばらく地に伏せつていようか」と笑顔でうなづ

きあつた。

実にたわいもない、でも心がどこかホツとするような会話がキラキラと昨日の事のように思い出される。

あの日の比叡山、比良山、伊吹山は前日の大雪で裾野から山頂まで雪で覆われて、冷気がピーンと張つていた。

「日本じゃないみたい。山水画のようね」と私は言った。

今日の比叡山はホンの少しだけ雪をかぶり、北上するにつれ比良山は上半分に雪を抱いている。真つ青な空と雪の白、冬山の濃い緑色と水温の低い深い水色の湖水の色、船尾の波形は白く、早春の清々しい風景に

心が次第に洗われていくようだ。

黒いカワウが長い時間、低空飛行を続けている。餌を求めて飛んでいる。

船内では琵琶湖汽船の男性ガイドさんが琵琶湖は三大古代湖だと説明してくれている。流入している河川は百十九本で、流出しているのは瀬田川一本で、もう一本は琵琶湖疏水なのだそう。

遠景に琵琶湖独特の「えり漁」の仕掛けが見えてくる。上空からは矢印のように見える定置網だ。琵琶湖大橋を過ぎ湖北に進むにつれ、進行方向左手には比良山の雪景色が明るい日差しに光って見える。

「彦根で降りようか？」と私が尋ねると「せ

つかくだから長浜まで乗って行こう」と、のんびり船旅をすることが目的の友人は笑いながら返事をする。彦根までは約二時間。長浜までなら二時間三十分だ。新幹線なら大阪東京間の移動距離だ。なんの計画も立てず、気分で行く先を決めようなんて、いかにも私たちがらしいことだ。

彦根港近くなると伊吹山が迫ってくる。伊吹山はさすがに全山真っ白。彦根城も肉眼でもはつきり見えてくる。彦根港では十人前後の方が下船された。

三十分後に雪見船は長浜港に到着。

下船されたほとんどの方が「竹生島クルーズ」の乗り場でチケットを交換されてい

る。この雪見船に乗って来られた方はそのチケットで、普通は往復三千元以上かかる運賃が千五百円という割安さだ。

竹生島はまたの機会に譲ることにして、「お腹減ったね」と意見は一致。船着場のすぐ北のホテルへ向かう。入口には自分の住んでいる地域では見られない「吊るし雛」と呼ばれる暖簾のような飾り物が珍しく、お雛様の季節で立派な段飾りの緋毛氈にも春を感じる。

ふきのとうの天ぷらや名物の赤こんにゃく、丁寧に味付けされた煮物や近江米のご飯も美味しく、お腹も心も旅気分を満たされて「長浜ぶらつと散歩しよう」と、イラ

ストマップ片手に散策が始まった。

まずは駅に遠いところから。長浜城へ。長浜城はもちろん現存しているものではなく、昭和五十八年、市民により再興されたもので、長浜城歴史博物館になっている。桜の名所・豊公園を抜け、琵琶湖の波打ち際を進む。カイツブリがぶかぶか浮いていて『春の海 ひねもす のたり のたりかな』そんな気分だ。

うーんと顔を上げて春の息吹を胸いつばい吸い込む。あたたかな日差しに身も心もやんわりとしてくる。

長浜城の先に『太閤井戸』という牌が波打ち際に建っていた。井戸の跡なのに湖の中

にある。太閤さんが長浜城を築城した時に利用していた井戸の跡のようだが、地形がかわつたのだろうか。

「ここなら良いかしら？」と、私はカバンに入れておいた小さなピンク色のブーケをそつと出してみた。従姉を散骨したこともあり、琵琶湖のどこかで投げ入れるつもりで持参していたものの、さすがに船上は観光客も多く、ご迷惑だと思いつめていたのだが、幸い人の気配もなく思い切つてそつと波打ち際においてみた。

太閤井戸の牌が墓石のように感じたからかもしれない。「この場所で溺死したのではありませんからね」と何度も小声で言

い訳を言つて手を合わせ、波をピタピタと叩いた。

友人は傍らで黙つて待つていてくれた。

いつか悲しみは薄らぐ日も来るだろうが、大切な人のことは忘れることは出来ないし、忘れたいはない。

雪見船にはまた、乗つてみたいと思う。



2015/02/21「雪見船から」明花

童話

星月夜はだつこの日

石川希理

腕時計の針は九時を過ぎています。塾  
でのおしゃべりが過ぎてしまいました。住  
宅街の中をおうちまで五分。携帯で連  
絡してあるのでお母さんが表で待つてい  
てくれるはずですよ。

「おそーい！ つて怒られるかな」

五年生の陽菜子はぺろりと舌を出して

小さな公園の側を通り過ぎていきます。  
回りの家々からは、まだ暖かいジヨンブリ  
アン色の光が漏れています。シンという秋  
の夜の空気の中で星月夜のコバルトブル  
ーの空から銀色の光が降りそそいでいま  
す。

公園の大きなクスノキが、星の光のシ  
ヤワーの中で黒々とした影を落としてい  
ました。

「おいつ」

小さな声が陽菜子の頭の中に響きま  
した。

陽菜子はLEDランプの付いた防犯ブザーを思わず握りしめました。

「だ、だれっ?」

「わたしだよ、私」

低いしわがれた声です。

「防犯ブザーを押すわよ!」

「わ、わたしだよ!」

ちよつと驚いたように語尾が跳ね上がりました。

「え?」

陽菜子は頭を上げました。

銀色の星月夜を背景に、黒々とした木の枝と、時折星の光を跳ね返して

かがやく木の葉が見えました。

「う、うそっ!」

大きなクスノキの枝が、ブルツと身を震

わせました。どうやらクスノキが陽菜子の

頭の上から声を掛けてきたようでした。

「思い出したかい:」

星の光を一杯浴びた陽菜子の顔に向

かつて少し弾むような声が降つてきました。

「あ:」

陽菜子の目の前に、暖かい日の光に

満ちた朝の公園が陽炎のように現れました。

陽菜子は四歳。お母さんがまだ生まれて半年もたたない弟の慶をだつこして二十メートルも前の道を歩いています。幼稚園に向かう途中、陽菜子は「私もだつこ」とぐずりだしたのです。「お姉ちゃんでしょ」お母さんはなだめてもあきらめない陽菜子をおいて背中を見せて歩き出しています。「だつこ、だつこ！」と陽菜子はしゃがみ込みました。

その時です。

「私がつこしてあげよう」と声がしました。

大きなクスノキがしゃがみ込んだ陽菜子

の頭の上で、お日様の光を浴びてニコニコ笑っているようでした。

「そんな高いところ……」

陽菜子が思ったとたん、陽菜子の足下にあつたクスノキの枝影が、さつと陽菜子を抱え上げました。

「あつ」

と声を出す間もなく、陽菜子はクスノキのてっぺんで木にしがみついています。

「ほら、だつこしたよ。みてごらん」

おそろおそろ目を開けると、お空が顔の前に広がり、お日様がニコニコ笑っておられました。

「家々の屋根がまぶしく光り、風が「ほうら」と叫んでブンと吹き抜けました。」

陽菜子はまるで空中に浮かんでいる気がしました。固い心が青空の中に溶け込んで、いつべんに爽やかな風になりました。足下を見ると枝の向こうに歩いて行くお母さんの姿が見えました。お母さんの丸い背中が、まるで後ろにいる陽菜子を見ているような気がしました。

「お母さん……」

心の中で呟くと、緑色の風が吹いて、足下がゆうらりとしたかと思うと、陽菜子は元の道に立っていました。

「お母ーさん」

陽菜子は駆け出しました。

「思い出したかい」

陽炎のような景色は消えて、陽菜子は一面の星空の中に溶け込んでいました。

あの時と同じクスノキの一番上の枝に立っています。手を伸ばせば星に届きそうです。

「今夜は星月夜」クスノキがいました。

陽菜子はぎゅつと幹にしがみつきました。家々の屋根がミッドナイトブルーに輝き、天空は果てしない星の海です。

風が「ほうら」といいながら、ヒュインと吹

き抜<sup>ぬ</sup>けていきました。

「早くお帰<sup>かえ</sup>り」

「陽菜子」クスノキの声とともに、陽菜子を

探<sup>さが</sup>すお母<sup>かあ</sup>さんの声<sup>こえ</sup>が聞<sup>き</sup>こえてきました。

陽菜子はもう元<sup>もと</sup>の道<sup>みち</sup>です。

「さよなら」

陽菜子は駆<sup>か</sup>け出<sup>だ</sup>しました。クスノキの匂<sup>にお</sup>

いがぐるりと渦<sup>うず</sup>を巻<sup>ま</sup>いて流<sup>なが</sup>れていきました。



風詠社文庫 [自選童話集]

一本50,000円

## 天然知能水

石川希理著

平成26年7月7日 風詠社発行 648円 + 税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットの「アマゾン」・「紀伊國屋」・「7ネット」などでも入手可。

収録作選評(抄)「そばづえ」メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなどころもあり、まだぼくらはいろんな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

コシーナ文庫 [短編小説集]

## エスプラネード

石川希理著

平成25年12月1日 コシーナブックス 645円 + 税

ISBN 978-4-904620-15-1 C0193

ネットの「アマゾン」からご注文下さい。

[エスプラネード]

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点になったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード(遊歩道)で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は(ま、しゃあないか)と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家 [神戸新聞書評・2013年3月30日]

◆ 受贈誌の紹介

● ご惠贈ありがとうございました。

● アクトス会員の皆さまには、閲覧希望がありましたら編集室までご連絡下さい。

① 『つぐみ』第10号 ペンの会つぐみ 1月31日発行 連絡先 079(492)0325 吉田様方

② 『東はりま文化子午線』第38号 3月31日発行 東播磨文化団体連合会 0795(44)0711

■ おしらせ

通信にも掲載し、以前にお知らせした内容もありますが、次の点にご注意下さい。

- ① 会費は二月末日までにお納め下さい。(退会の場合はご連絡無くとも会費の有無で配意いたします。)
- ② 例会は原則2時から4時まで(延長しても5時まで)とします。
- ③ 原稿締めきりは、2/5/8/11月末日です。締め切り月、ひと月の間に送信下さい。
- ④ アクトス活動の間は、お名前の呼び捨て、或いは敬称に「くん」はご遠慮下さい。
- ⑤ H Pの掲示板に例会報告を載せております。

◆ 右の「受贈誌の紹介」にあります『東はりま文化子午線』第38号には、

瓜生八頼子さんの俳句

「蕃立て夕管明日は咲こうかと」

が掲載されています。





◆ 中高年齢労働者福祉センター  
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21  
電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、2時からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

## 編集室から

◆次号(第27号)の原稿締切は5月末日必着です。

◆5月例会は16(土)です。

第3土曜です。14時から2時間程度です。

24号以降を持参下さい。

(参加メンバーで前後します。)

◆7月例会は18日(土)です。

※毎回例会後、参加可能の方がおられましたら懇親会をおこないます。

◆HPに、26号までを、PDFファイル

で掲載しました。URLは次のとおりです。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>

(ネット検索の窓から「文芸□アクトス」といれて探されても出てきません。

□はスペース)

※なおHPには「掲示板」がありません。例会の報告などはここに開催後1週間くらいで載ります。ご覧下さい。新しい書き込みがあるとメールで連絡があるシステムもあります。掲示板を開いて設定してみてください。

◆本号から締めきりが、ひと月ずつ早くなっています。2・5・8・11月末日がそれぞれの締めきりです。発行日は

今まで通り2/5/8/11月の1日付けです。(再掲)

◆原稿は必ずデジタルデータをメールに添付してお送り下さい。

◆例会の開始時刻が2時からとなりました。2時間程度の予定です。

(再掲)

◆表紙

棟近喜忠氏の絵を使わせていただきました。ありがとうございました。手持ちがなくなりましたので、とりあえず今号は見てのとおりで、これはインターネットの登録無料のガーデニングゲーム「ニフティ箱庭」。その中の私の箱庭です。

「希理」

■ 入会下さい。ネットで参加可能です。

◆ 入会するには◆

① 会費1年分(12,000円)を下の振込先に振り込み

② 〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・  
メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は2,400円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆ 会費等振込先(郵便・当座)◆

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※会費以外に発表負担金などは不要です。

アクトス 第26号

第7巻第2号・通巻第31号

発行 平成二十七年五月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円